

夕日てりそふをいそぎ歸らん

小幡八重子

かけり行く夕日とやめて山ふかみ

しぐれぬ先の紅葉とはイヤ

佐々木雪子

嫁きては三とせもあはぬ友のいへ

紅葉みがてら今日は訪はまし

印東昌綱

年毎のもみぢのころにおとづれて

したしくなりぬ山守がをぢ

佐々木信綱

男の子わまた道のち茅を拂ひけり

明日山ぬしのもみぢ狩とて

蝦夷のみちしば

鷺

水

月の小樽みなと

君戀ふる袖に涙のはらはれて

こゝろとくもる波の上の月

「エルム」となんいへる

都には見ぬいと大きやか

なる木ありけり

降る雨をしばしよけんとわれも人も

エルムのかけにたちつとひけり

旭川をたち出で夕張

となんいへる里に宿り

ける夜よめる

旭川今朝越え來れば旅衣

ひも夕張の里につきけり

室蘭より舟にて函館に

わたる

室蘭を昨夜棹さして玉くしけ

曙いそく函館の海

津輕の海をわたる

風になひき波にゆられてはるくくと

ゆくへも知らぬわが身なるらむ

月の夜

夏すぎ秋も

月も今宵の

なれし小杖を

上野の奥を

こゝよかしこの

聲もおしませ

月にうらみを

彼方の人に

思ひをいつか

うつして見せん

なかばなる

さひしさに

友として

とめ來れば

草に木に

なく虫の

もらすごと

われも猶

恐はずに

すべもがな

水

碓氷の紅葉

東くめ子

人の巧と 神の業

梢の色の薄からぬ

げに山姫の織かけし

思ふまもなく隧道の

岩さり開き山を裂く

湯氣の力に登り行く

俄に夜は明け渡り

木々の紅葉にうつろひて

いつれも深さみ山路の

うすひの嶺の紅葉見ん

紅葉の錦うつくしと

わやめも分ぬ闇にいる

力は神かあなわやし

車も人のたくみとは

朝日にあらぬ夕づく日

見る目はゆく照まさる

夢

敏子

ゆめと知りせはとこしへに

さめざらましを敷妙の

まくらの下は海なれと

君を見るめは生ひやらて

磯うつ波の音高く